

学生の保育実践力を高めるゼミ研究の教学効果についての考察

—幼児向け布絵本制作実践例

会津大学短期大学部

社会福祉学科

郭 小蘭

学生の保育実践力を高めるゼミ研究の教学効果についての考察

—幼児向け布絵本制作実践例

郭 小蘭

平成27年1月10日受付

【要旨】本論文は私が指導する2010年度ゼミ研究「保育実践を学ぼう」（動かせる布絵本『りかちゃんのいちにち』）をまとめたものである。目的は学生が保育内容の指導法に関する研究を行い、保育実践力を高めることで、対象は象徴能力が発達する心理発達段階にある3、4、5歳幼児である。考案・制作・保育現場で実際に幼児に働きかけることを通して、幼児が布絵本に魅力を感じるか。また、ゼミ研究を通して学生が将来の保育者としての自信向上に繋げるかを考察する。

1. はじめに 学生の保育実践力を高めるためのゼミ研究の必要性

現場の保育者は保育環境構成のため、市販教材の他に家庭で使わなくなった日常生活用品を利用して新しい玩具を手作りすることがよくある。このような作業は参考文献の検索、玩具の考案、材料選び、制作の過程を要するが、子どもに提供してから子どもの反応を見て修正することも必要である。この工程は保育のPDCAサイクルに近いといえる。保育を専門とする学生は卒業後即戦力としてこのような作業を要求されることがあるので、在学中にこのような工程を一度実体験した方が保育実践力向上につながると考える。本学では保育実習の授業はあるが、保育園での実際の仕事を体験、学習するためのもので、本格的な玩具制作をすることはほとんどないのが現状である。学生の保育実践力の養成という視点から見てもこの領域の実践研究の必要性を痛感した。このため、私は1999年度からゼミ生を対象に乳児および幼児向けの布玩具の制作研究および保育園現場での指導法に関する実践研究を「保育実践を学ぼう」というテーマでゼミ研究を行ってきた。幼児期の知覚と認知の発達にはピアジェによる認知発達理論の区分に基づいて考えると前操作期（2歳から7歳ごろ）にある。前操作期は前半の「前概念的（象徴的）思考段階（2歳から4歳ごろ）」と後半の「直観的思考段階（4歳から7歳ごろ）」に分けられるという（井戸ゆかり, 2012年）。ゼミ研究の対象は、前概念的思考段階と直観的思考段階に跨り、象徴能力が発達し、ごっこ遊びが盛んに見られる3歳、4歳、5歳の幼児とする。本論文はその中の2010年度に行われたゼミ研究の布絵本『りかちゃんのいちにち』について考察する。

2. ゼミ研究テーマ選びと布絵本の制作

① 文献検索とテーマ選び

今まで布絵本が保育現場で使われているものが少なく、市販の布絵本も内容がほとんど乳児向けである（いしかわまりこ, 2007年、八田久弥, 2001年）。これらの本は布玩具の裁縫の技術を知るのに大変参考になるが、動かせたり、つけたり、はがしたりする操作、蝶々結び、しかけを楽しむなど、直観的操作を必要とする幼児向けの内容の布絵本はほとんどない。保育現場で子どもの生活と遊びを通しての保育という理念からみて、玩具としては、種類や機能面における限界を感じた。また、布玩具に関する研究も少ないのが現状である（水谷亜由美・夫馬佳代子, 2009年）。布絵本は安全で、いろんな形が簡単にでき、カラフルな色彩で視覚的特徴に注意を向けやすい。また、手触り感がやさしく、子どもに気持ちよさ、ぬくもりを感じさせることができる。この時期の幼児の発達特性を配慮した動かせる布絵本は幼児の想像力に刺激を与える効果が期待できる。

そこで、布絵本制作関係の参考文献をゼミ生が調べるように指導すると共に、ゼミ生全員で3～5歳の幼児の発達特性と必要な玩具について検討した。幼児が制作物を使って遊ぶことで何を感じられるか、何をできるかについて考え、①基本的な生活習慣の形成（生活様式、清潔に関する態度の育成）、②食事・食材に興味を持つ食育の観点から「子どもの起床から登園までの流れ」をテーマにした。

② ゼミ研究の目的

布素材を用いて、幼児の基本生活習慣の形成と食育に結び付くお話として朝起きてから登園するまでを描く布絵本『りかちゃんのいちにち』を制作し、保育現場で幼児と布絵本を使って遊びながら指導する実態観察を通して、幼児達がこの布絵本をどう感じるかについて調べる。

③ 『りかちゃんのいちにち』の制作

まず、生地や材料について話し合いをし、多様な素材（フェルト、布、タオル、糸、ボタン、マジックテープ、



巾着、靴紐、ビーズ、便座カバー、キルト生地、綿)と色を使うことが大事と考えた。ストーリーは朝幼児が目覚めてから布団から出る、服を着る、タオルで顔を拭く、朝食を食べる、歯を磨く、弁当箱におかずを入れて巾着に入れる、靴を履く、ハンカチをポケットに入れる、家を出る、保育園に着いて園庭で遊ぶとした。さらに、仕掛け(タオル、朝食と弁当のおかず、歯ブラシ、ポケットに入れたハンカチを可動にする、弁当の巾着の紐を解いたり結んだりできる、靴紐を蝶々結びする、りかちゃんが滑り台を滑る、トンネルに男の子が隠れるなど)をつける。特に食育につながるきっかけになるように食事場面での食材(ご飯、味噌汁、しゃけ、納豆、おにぎり、タコウインナー、ハンバーグ、卵焼き、ブロッコリー、イチゴ、スパゲッティ)を多く揃えた。最後に実施

前にゼミ生が模擬保育を行い、問題点について話し合いをし、布絵本を修正した。できた布絵本『りかちゃんのいちにち』の場面ごとの写真を上に示す。

3. 保育園での幼児への遊び指導の観察と結果・考察

① 観察方法

観察対象の幼児は「社会福祉法人博愛会すくすく園」の3歳児（男児1名、女児2名）、4歳児（男児2名、女児1名）と5歳児（男児1名、女児2名）の合計9名であった。観察は保育園の指定された保育室にて3歳、4歳、5歳と年齢順に20分ずつ行った。観察の順序はまず幼児に挨拶し、歌いながら手遊びをした後、幼児達の名前を聞く。そして、幼児と話をしながら布絵本を幼児に見せる。幼児に布絵本のページをめくりながら場面ごとの内容を説明し、幼児に質問したり、触ってもらったり、動かしてもらったりして遊んでもらう。観察は遊び係と記録係に分かれて行った。幼児の表情、言葉、遊び方や安全性の問題についてまとめた。子どもが遊ぶ写真については個人情報保護の観点から後姿のものだけを示す（写真下は3、4、5歳児の遊びの様子）。また、以降本論文に掲載されている写真、結果について協力保育園の承諾を得ている。



3歳児



4歳児



5歳児

② 結果と考察

幼児の反応を以下の表にまとめた。

場面	3歳児	4歳児	5歳児
布絵本表紙	「わあ！なにそれ！」「大きい！」触って驚きと期待。	指さして「絵本！！」と叫ぶ。喜びの様子。	真剣に説明を聞く。興味を感じている様子。
着替え	「ボタンをつけたい！」と全員が嬉しそうにやった。	ボタンを真剣につけた。集中している様子。	「簡単だし」とスムーズにボタンをつけた。
園庭	「ビーズだ！」と興味津々に砂場を触っていた。驚きながら滑り台を楽しんだ。トンネルの男の子に驚いた様子で何度もめくって見た。	「おお！！」「あははは」と滑り台に興味を示し、何度もりかちゃんのマスコットを動かして滑り台で遊んだ。強い興味を示した。	ドアの取っ手を一緒に「せーの」と園庭に入り、「すご〜い」と砂場を触り、トンネルを「かまくらみたい」と言って、一緒に楽しんだ。
お弁当	「おにぎり！」「たまご！」など食材の名前を言った。	「ハンバーグ！」「ウィンナー！」など元気に言った。	「卵焼きだ！」「タコウィンナーだ！」と食材が分かる。
靴紐を結ぶ	紐を回しただけで「はい、できた」と言った。まだ結べない様子。	「やりたいな」けど「できない」と言ってゼミ生に手伝ってもらい何とか結べた。	「できるよ」と言って、蝶々結びをした。他に結べない子もいて個人差があった。

上述観察結果から3～5歳児全員が布絵本『りかちゃんのいちにち』に大変興味を示し、このような布絵本は幼児にとって魅力的な教材であると言える。年齢により語彙の数、器用さ、想像力に違いが見られ、幼児の各発達段階の特徴が見られた。

4. 学生の保育実践力を高める教学効果の検討

以下の表に「保育実践を学ぼう」ゼミ生10名が布絵本『りかちゃんのいちにち』制作と幼児の指導法に関する実践研究を通して得た感想を分類し、以下の表にまとめた。

分類	学生の具体的な感想
幼児の発達過程に対する理解	<ul style="list-style-type: none"> ・場面一つ一つでも感じ方の年齢差、個人差があることがわかった。 ・靴紐を結ぶ場面で3歳児は回すだけ、4歳児は蝶々結びに挑戦するのが難しい。5歳児は蝶々結びを一人でできる子が出てくる。また、しようとしたができなかった子、できないと挑戦しなかった子、3人3様の発達過程があることを実際に経験し、理解できた。 ・保育の現場で働く時、子どもの目線に立って物事を考えること、子どもの気持ちを汲み取り、一人ひとりに合った働きかけ方をすることは常に必要と感じた。
保育の環境、内容と指導法に対する理解	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広い保育実践について学び、保育のあり方について認識できた。 ・保育は単に楽しいだけでなく、子どもの発達に合った相応しい経験となる遊びの大切さを学んだ。 ・子どもの視点に立って指導案を作成することの困難さと重要性を学んだ。 ・子どもの反応などから子どもの発達の姿を目にし、保育内容の指導法について理解を深めた。 ・実践的保育への理解を深めるとともに今までよりも広い視点を持って考えることができるようになった。 ・計画、実践、反省といった実践的な保育の難しさを実感した。 ・保育環境に対する理解を深めることができた。 ・乳幼児保育の中で大切なものの一つとして「環境」が大事である。 ・壁面や布絵本も幼児の教材として子ども達を取り巻く環境の一つであるといえる。
玩具制作技能	<ul style="list-style-type: none"> ・布素材の暖かさを改めて感じて、現場に出てから布を使ってたくさん子ども達に伝えていきたい。 ・普段、針と糸を使用して自分で作ることがなかったため、ゼミ活動で初めてのマスコット作りは難しかった。 ・手縫いで制作するのは小学生以来であった。 ・裁縫技術や発想力も上がったと感じた。
チームワーク能力	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ目標に向かって頑張っていくことができた。 ・協力の大切さや相手の立場になって物事を考えるなど、このゼミでこそ多く学び得た。 ・ゼミ生同士であらゆる視点から意見を出し合い、共有することで、遊びについての奥深さや、これから保育現場で必要とするコミュニケーション能力等幅広く身についた。

上の表の感想内容を分析すると、布絵本制作実践のようなPDCAのサイクルの中で、学生は幼児の発達過程および保育の環境、内容と指導法に対する理解が深まり、チームワークの重要性を体感することができ、また裁縫技

術や発想力も向上し、将来の保育者として成長が見られたと考えられる。学生の総合的保育実践力に対する教学效果があると結論づけられる。

5. 今後の課題

『りかちゃんのいちにち』は幼児向けの布絵本、動かして遊べる絵本、幼児の生活に密着した内容であるという点が本ゼミ研究の特徴で、本論文では、このゼミ研究の過程を創作的玩具制作過程と、学生の幼児の指導法に対する理解を深めた保育実践力の向上という2つの側面について分析した。この領域の基盤研究データとして寄与することができると考えられる。また、保育者養成という視点から見て、本事例研究の方法は今後の保育者養成の研究課題として検討していく必要がある。本研究は1つの実践事例研究であるため、今後、より多くの事例研究を増やせば、幼児の教材として使う創作的な玩具制作過程と学生の保育実践力の向上との関係を明らかにすることができる。

文 献

- (1) 小原敏郎・神蔵幸子・義永睦子編著（2013年）『保育・教職実践演習 保育者に求められる保育実践力』建帛社
- (2) 井戸ゆかり編著（2012年）『保育の心理学Ⅰ 実践につなげる、子どもの発達理解』萌文書林 pp. 68-71.
- (3) 岩田純一（2011年）『子どもの発達の理解から保育へー＜個と共同性＞を育てるためにー』ミネルヴァ書房
- (4) 山田由紀子（2010年）『布で作るおもちゃ』株式会社パチワーク通信社
- (5) 渡辺恭子編集（2010年）『フェルトで作るかわいいマスコット、既刊掲載人気作品集』ブティック社
- (6) 水谷亜由美・夫馬佳代子（2009年）「乳幼児を対象とする布絵本の制作とその教育的効用について」『岐阜大学教育学部研究報告、教育実践研究』第11巻 pp. 107-120.
- (7) いしかわまりこ（2007年）『かんたん！かわいい！①②③歳児の布おもちゃ&布絵本』チャイルド社
- (8) 青木直子（2005年）「就学前後の子どもの「ほめ」の好みと動機づけに与える影響」『発達心理学研究』第16巻第3号 pp. 237-246.
- (9) 春山明美（2009年）『赤ちゃんのための手作りおもちゃ』ちいさいなかま社
- (10) 八田久弥（2001年）『夢を育むワクワク手作り絵本』株式会社小学館
- (11) 花篤實・山田直行・岡一夫編著（1990年）『表現—絵画製作・造形—理論編』三晃書房

謝辞：本研究にご協力いただいた社会福祉法人博愛会すくすく園の子どもたち・先生方と2010年度の郭ゼミ生のみなさまにお礼申し上げます。

